

水中写真と僕

ダイビングを始めて何年になるか、定かな記憶はない。

社会人になり、趣味を楽しむほどに金銭的余裕ができた頃、子供を連れて石垣島を訪れた折、「オープンウォーター、3日で取得。4日目から君もダイバー！」と書いた立て看板に惹かれ、講習を受講してしまった。ところが、今では考えられないほど滅茶苦茶な商売で、初日に3人ほどの受講生が集まった頃、「今日はビデオ学習です。今から3本の動画を見て各人の責任で解散してください。」と言い残し、ショップにはインストラクターはいなくなった。僕以外の生徒は1時間ほど経ったころにはエスケープし、これが2日間続き、3日目に内海で耳抜きとマスククリア等の数項目の講習を受け、5mほど潜ることができれば、免許皆伝。所要時間1時間の短い実習で無事、ライセンスを取得した。その後、初めてのポートダイビングに参加した折、自力だけでは潜行できず、ロープを伝って、ゆっくりゆっくり降下するしかなく、耳抜きもままならない状況で、これでは、いくつ命があっても足りないと感じ、1999年に再度PADIという団体でライセンスを再取得することにした。数か月の講習と実習を経て、やっとヨチヨチ歩きの幼稚園児程度のダイバーが誕生した。そこでの師匠から水中写真を教えて戴き、その後多くのフォト派インストラクターと出会った。石垣島の有名人の中本純市さん、その弟子の堀くん、沖縄県本部町の肇さんや友くん。写真家の吉野雄輔さんとの出会いは、写真を超えた彼の人生感に接し感動した。鍵井靖章さんのセミナー等で話す機会があり、同じ被写体でも撮り方によって大きく異なった写真になることを教えて戴いた時から写真に対する苦しい混乱が始まり、それは今もなお続いている。そもそもダイビングに対する憧れは、学生時代の思い出に遡る。

同級生だった眼科医の近藤先生がダイビングの楽しさを力説していた姿を忘れられずに、強烈な印象が心のどこかに焼き付いていたのではないかと思う。ある夜、彼の住まいを訪れた時、頼んでいた初めてのウエットスーツが届き、満面の笑みを浮かべ、頭を覆うマスクから足元の足袋まで全身黒のダイビングスーツを身に纏い、一向に脱ごうともせず、汗をタラタラかきつつ、「ダイビングは楽しいぞ、しかし危険と隣り合わせだから人格が現れる、自己中心的な奴とバディを組んで潜ると命を落とすぞ。」と何度も繰り返し話しながら酒を酌み交わすので、さぞかし楽しいスポーツに違いないと思ってしまった。

海の中では、数ミリのエビやタツノオトシゴの仲間から、10mのジンベイザメやクジラまで様々な大きさの多くの種類の魚が食物連鎖の中で生息している。海面を漂う小さな流れ藻の中にもオコゼやハギの幼魚が隠れるように棲み、小さな根にはサンゴが自生し、その間にキンメドモドキやスカシテンジクダイが身を寄せて群れを成し、それを餌にする大型のイザリウオ、ハタの仲間がその根における食物連鎖のトップに君臨する。さらに、その大型魚の鰓や口をクリーニングする小型のエビやベラが共生している。小さな世界の中で終息する連鎖は地球上でのそれに似ている。

水中の生物は、厳しい弱肉強食の世界に身を置きながらも協力・共存し繁栄を目指し、子孫

を守っている。これこそが生きるための基本ではないか。広大な海底の一部の根の中で繰り広げられる魚たちの日常こそ、人類の生の根本ではないのかと考えるが、果たして、周囲の人と自己を比較する知能と欲望を持った人間が共存し支え合うことを成し遂げることができるのだろうか。これからも、水中の世界の生き物たちにその答えを学びたい。

2020年11月

三根 浩一郎